

令和元年6月3日現在

機関番号：10104

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370422

研究課題名(和文) インド神話の普遍性・独自性・文学性を解明する比較研究

研究課題名(英文) A Comparative Study of Indian Myths: in Search of their Universality, Individuality and Literary Feature

研究代表者

中村 史 (Nakamura, Fumi)

小樽商科大学・商学部・教授

研究者番号：20271736

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：文学研究が十分に発達しているとは言えないインド(古典)学の分野において、神話の普遍性と独自性、文学性を究明した。古代インドのサンスクリット語による大叙事詩『マハーバーラタ』を具体的な研究対象とし、そこに収められた神話・説話の性格、すなわち、世界の他地域・他民族との共通性・普遍性、それに対する独自性、そして文学としての性格を、日本古典研究、口承文芸研究(民俗学的方法)、比較神話学研究など、他分野の研究手法を導入する、これまでになかった方法によって明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文学のみならず人文学の学問研究、とりわけ古典の研究は、今や世界的に衰退の途を辿っている。そのような現状において、古典文学の新たな方法による研究は研究者に対しても一般社会に対しても、その存在について振り返らせ、その価値について知らしめるものであり、学術的意義や社会的意義を持つものと考えられる。

また、文学研究が十分に発達しているとは言えないインド(古典)学の分野に、日本古典研究、口承文芸研究(民俗学的方法)、比較神話学研究など、他分野の研究手法を導入しようと努めたことは一定程度認められて良いものと考えられる。

研究成果の概要(英文)： Studies of literary works are rather mature in the field of Indology. Taking the Sanskrit Epic Mahabharata as an example, I have tried to apply the methods in the field of Japanese classical literature, oral literature and comparative mythology to the study of Indian mythology. As a result, many interesting aspects of universality, individuality and literary features of Indian myths have been clarified.

研究分野：文学

キーワード：文学 インド 神話 説話 叙事詩 サンスクリット 比較

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

本研究者はもともと日本古典文学、特に日本の神話・説話を専攻し、口承文芸のフィールド・ワークや民俗学的方法、比較神話学の方法も経験した者であった。その後、機会を得てインド学・インド古典学の言語（サンスクリット、パーリ語）とインド学・インド古典学の成果を学んだ。そのことによって、インド古典文学の研究に日本古典文学や口承文芸研究（民俗学的研究）・比較神話学的手法を導入する準備が整いつつあった。

### 2. 研究の目的

インド学・インド古典学の分野での文学研究はテキスト校訂や翻訳などの基礎的研究を除けば、十分に確立しているとは言い難い。哲学・思想研究に圧倒されるかのように、独自の立場を十分に持ち得ていない。独立した世界を持つ日本古典文学的手法を導入し、また、口承文芸研究（民俗学的研究）・比較神話学的手法を取り入れることによって、こうしたインド学・インド古典学の分野での文学研究に活路を見出す可能性を追求することを目的とした。そして、具体的な研究対象として、インド神話の宝庫とも言える『マハーバーラタ』の、その第13巻「教説の巻」を用いている。上記のさまざまな手法を用いつつ、インド神話の世界の他地域・他民族との共通・普遍の性格と独自の性格、そして文学的性格を提示することが今回の科学研究費補助金による研究の目的であった。

### 3. 研究の方法

(1) 『マハーバーラタ』第13巻「教説の巻」は全体として混沌としているとも言える様相を呈している。「教説の巻」全体の構想は実際どのようなものになっているか、なぜそのようなものになっているかを、日本の説話文学研究の方法を参照し、また、語りの場を想定し口承文芸研究の方法を応用することによって、明らかにすることに努めた。

(2) 『マハーバーラタ』第13巻「教説の巻」に収められた、特徴的な5つの神話・説話、「第1章 蛇に咬まれた子供」、「第5章 鸚鵡と森の王」、「第50・51章 チャヴァナ仙と魚達」、「第93章 七仙人の名乗り」、「第102章 ガウタマ仙の象」について、日本語訳の確定を行なった。そして、日本の説話文学研究、口承文芸研究の方法などを応用することによって、それぞれの神話・説話の普遍性・独自性・文学性を明らかにすることに努めた。

### 4. 研究成果

(1) 今回の科学研究費補助金の成果として、単著『七仙人の名乗り—インド叙事詩『マハーバーラタ』「教説の巻」の研究』の出版を挙げることができる（平成29年12月、「5. 主な発表論文等」〔図書〕欄参照）。この単著は、北海道大学大学院文学研究科に受理され、それによって博士（文学）の学位を得ていた（平成27年3月25日）博士論文「サンスクリット叙事詩『マハーバーラタ』第13巻の文学研究」を基とするものである。そこに原稿を追加し、全体として改稿を行なった。目次によって内容の概要を示せば、次の通りである（「まえがき」、「序章」、「終章」、「Summary」、「文献一覧」、および、各章の「はじめに」と「おわりに」を省略）。

#### 第1章 『マハーバーラタ』第13巻「教説の巻」の研究

第1節 ユディシティラとビーシュマの対話(1)—「教説の巻」「布施の法」の構想—

第2節 ユディシティラとビーシュマの対話(2)—「教説の巻」「布施の法」の全章構成表—

#### 第2章 『マハーバーラタ』第13巻第1章「蛇に咬まれた子供」の研究

第1節 「蛇に咬まれた子供」の考察(1)—運命か行為か—

第2節 「蛇に咬まれた子供」の考察(2)—問答か真実語か—

第3節 「蛇に咬まれた子供」の和訳

#### 第3章 『マハーバーラタ』第13巻第5章「鸚鵡と森の王」の研究

第1節 「鸚鵡と森の王」の考察—慈悲と敬愛の念—

第2節 「鸚鵡と森の王」の和訳

#### 第4章 『マハーバーラタ』第13巻第50章・第51章「チャヴァナ仙と魚達」の研究

第1節 「チャヴァナ仙と魚達」の考察—共に住む者への愛情—

第2節 「チャヴァナ仙と魚達」の和訳

#### 第5章 『マハーバーラタ』第13巻第93章「七仙人の名乗り」の研究

第1節 「七仙人の名乗り」の考察(1)—言葉遊びと魔女退治—

第2節 「七仙人の名乗り」の考察(2)—言葉遊びはどう変わるか—

第3節 「七仙人の名乗り」の和訳

#### 第6章 『マハーバーラタ』第13巻第102章「ガウタマ仙の象」の研究

第1節 「ガウタマ仙の象」の考察(1)—良き行ないと言祝ぎ—

第2節 「ガウタマ仙の象」の考察(2)—言祝ぎはどう変わるか—

上に挙げたもののうち、第2章（「蛇に咬まれた子供」）、第3章（「鸚鵡と森の王」）、第4章（「チャヴァナ仙と魚達」）、第6章（「ガウタマ仙の象」）が、インド神話の普遍性と独自性について究明した部分、第5章（「七仙人の名乗り」）がインド神話の文学性について究明した部分に相当する。「七仙人の名乗り」の中に、カーヴィヤ修辞文学に通ずる多くの文学技巧を見出すことができた。定説では、世俗的なプラーナ文献につながってゆく位置付けられている『マハーバーラタ』にあっての稀有の例を提示するものである。こうした例が他にあるか探求することがこれからの課題である。

(2) 上記(1)の研究成果に加え、その作業と相前後し、勤務校の小樽商科大学において科学研究費補助金による研究会を2回開催した。第1回として、平成27年8月31日～9月2日、種村隆元氏（当時大正大学・特任准教授）を講師として招聘し、「サンスクリット写本研究会」を、第2回として、平成28年8月23日、志田泰盛氏（筑波大学・准教授）を講師として招聘し、「インド古典写本研究会」を行なった。いずれの機会にも北海道内外の研究者と共に研鑽を積み交流を持つことができた。このようなことを契機として、その後研究会参加や国内外の研究者との交流が一気に広がっていった。本来インド学・インド古典学分野の出身でなかった申請者にとって、今後の研究発展のための大きな前進であったと言える。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

- (1) 中村 史、「『マハーバーラタ』第13巻「教説の巻」「布施の法」の構成と概要」(『小樽商科大学人文研究』第129輯、平成27年3月、91～110頁、<https://ci.nii.ac.jp/naid/40020409890>)
- (2) 中村 史、「七仙人の名乗り：『マハーバーラタ』第13巻第93章の説話・和訳研究」(『小樽商科大学人文研究』第128輯、平成26年12月、55～84頁、<https://ci.nii.ac.jp/naid/40020321522>)
- (3) 中村 史、「『マハーバーラタ』第13巻の構想と説話」(『印度学仏教学研究』、査読有、第63巻第1号、平成26年12月、292～298頁、[https://doi.org/10.4259/ibk.63.1\\_298](https://doi.org/10.4259/ibk.63.1_298))

〔学会発表〕（計 2 件）

- (1) 中村 史、「語り物『マハーバーラタ』の構想・技巧・異伝―「七仙人の名乗り」を例として―」、インド思想史学会第22回学術大会（京都大学・楽友会館）、平成27年12月19日
- (2) 中村 史、「『マハーバーラタ』第13巻の構想と説話」、日本印度学仏教学会・第65回学術大会（武蔵野大学）、平成26年8月30日

〔図書〕（計 2 件）

【単著】

- (1) 中村 史、『七仙人の名乗り―インド叙事詩『マハーバーラタ』「教説の巻」の研究―』、国立大学法人小樽商科大学出版会、平成29年12月。978-4-8460-1660-9

【共著】

- (1) 岩波書店辞典編集部（編）、『世界の名前』、「10 神話・伝承の中の名前 アトリ仙の名乗り インド神話」、岩波書店、平成28年3月。978-4-00-431598-8

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等  
<https://researchmap.jp/read0183692/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者（無し）

研究分担者氏名：  
ローマ字氏名：  
所属研究機関名：  
部局名：  
職名：  
研究者番号（8桁）：

### (2) 研究協力者（無し）

研究協力者氏名：  
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。